

海王丸

少し前の話になるが、長い連休を利用して北陸をグルッとしてきた際、最後に行ったのが富山であった。長野、石川、福井、富山と廻ってきたわけだが、正直、福井での2泊が想像以上に地味であっ



たので、次の富山がどんな所なのかと内心そわそわしていた。またよりによって富山といういまひとつピンとこない所がシメなわけである。

高速を降りて、富山に入った瞬間まず目に入ったのが「海王丸パーク」という看板であった。それまで、私は「海王丸」なんて聞いたこともなかった。一緒にいた者が「海王丸があるのか!」と異常なまでに興奮気味であったので、一体何なのかと思いきや、航海練習のための大型練習帆船であったのである。

1927年に鹿児島の水産学校の生徒達が航海練習をしている際、暴風雨に遭ったことにより、船が沈没し、53人以上の生徒が、金華山沖で水死したことが事のはじまりである。この惨事を受けて2艘の大型の練習帆船が造船された。それが「日本丸」と「海王丸」である。当時の国家予算としては、破格の額で造船されたと言われるほどの一大プロジェクトであっ



たとされている。1930年1月に第一船の「日本丸」、続いて2月に第2船の「海王丸」が進水した。このとき、この2艘は文部省の管轄下にあった。興味深いのが、この海王丸、太平洋戦争の際には、石炭の輸送に従事していたという経歴を持つのである。その際は、この白く美しい「海の貴婦人」とまでいわれた船体が、灰色に塗

り変えられてしまったのだという。戦後は海外在留邦人の復員船として活躍をしていた。その時も2,700人以上の人々を輸送したといわれ、大活躍であったようである。その後、また再び白く塗り替えられ、かつての上品な「海の貴婦人姿」にもどることとなる。その後も、数多くの、遠洋航海を行うこととなり、1960年には、日米修交百年祭、1967年にはカナダ建国百年祭といった世界規模の遠洋航海も行った。



1974年に老朽化が進んだことを受け、遠洋航海の規模が縮小を余儀なくされた。

1989年、航海練習船としての役目を終え、練習船としての任務は海王丸II世に託された。案の定、引退後は引き取り先に日本各地の自治体が名乗りをあげたみたいである。現在は、富山新港にずっとあるが、当初、富山と大阪にて5年交替で係留する話になっていたようである。しかし、結局、大阪の方には別の帆船が来ることとなったので、海王丸は恒久的に富山新港にて係留することとなる。ちなみにもう一方の『日本丸』に関しては、横浜の日本丸メモリアルパークにて保存・展示されており、現役当時のままの姿を見ることが出来る。私も行ったことはないのだが、ここには横浜みなと博物館という資料館もあるようなので、私も近々、行こうと考えている。

1930年から1989年まで、実に59年余りの長きに渡って活躍し、百万海里以上を航海したといわれている。11,190人も海の男を輩出し、太平洋戦争にも関わっていたという経歴を持つのである。そんな帆船を目の前にして、浪漫を感じずにいられるわけがない。



海王丸は全長97mの白い大型の帆船であり、まさに「海の貴婦人」と呼ばれるにふさわしい上品な存在感なオーラを放っている。

訓練船でありながら、なかなか高貴で圧倒的な存在感を放っており、最高にかっこいい船である。船内は教室や食堂な



「幸せを呼ぶ」とされる
海王丸のタイムベル

どいかにも訓練船といったような部屋から、船長公室や士官サロンなどといったところまで見学出来てなかなか面白い。大型訓練帆船として、数多くの海の男を育て上げた海王丸はなぜか恋人の聖地とされているのである。訓練生達によって毎日磨かれていたことから刻印も見えなくなったという感慨深いタイムベルが今は「幸せを呼ぶ鐘」としてもはやされてしまっているぐらいである。そもそも何故海王丸を恋人の聖地にしてしまったのか疑問に思い、検索してみると、なんと恋人の聖地と「認定」されている場所は日本国内に100か所以上あるというのである。恋人の聖地というのは、そもそもNPOが「少子化対策と地域活性化」という計画のもと行っているプロジェクトの様である。ちなみに富山県からはクロスランドタワー、北陸自動車道/有磯海サービスエリア



船長が人と面会したり、会議行う、
船長公室

そして海王丸パークの3か所が選出されている。正直、こうしてみても選定基準がいまひとつピンと来ない。どうしたら高速のサービスエリアと少子化対策が結びつくものか。いわゆる眺めがロマンティックということなのか。だとしてもなんともいい加減なプロジェクトである。しかし、日本全国の恋人の聖地が掲載されているだけあって、そのホームページはなかなか興味深かったので色々見てい



200人分の食事を毎日4回作っていたキッチン
調理室

ると、私の出身地の千葉県木更津市からは中の島大橋が選ばれていた。確かにこの橋はテレビ等で取り上げられ、一時期話題にもなり、恋人を背負って渡り切ると結ばれるという都市伝説も存在する。橋の袂には木更津のシンボルであるタヌキ(證誠寺伝説)のオスとメスの像があったり、フェンスに南京錠がたくさんつけられていたりなど、いわば、典型的なそういうスポットである。話は海王丸から大分逸れてしまったが、中の島大橋も綺麗な橋ではあるので、機会があればぜひ見に行っていたきたい。

それにしてもこの歴史的に貴重な訓練帆船を偶然にも見つけることができたのは幸運だったと思う。それもわずか 400 円で船内がまるまる見学可能なのである。富山を訪れることがあれば、ぜひとも足を運んでいただきたい。

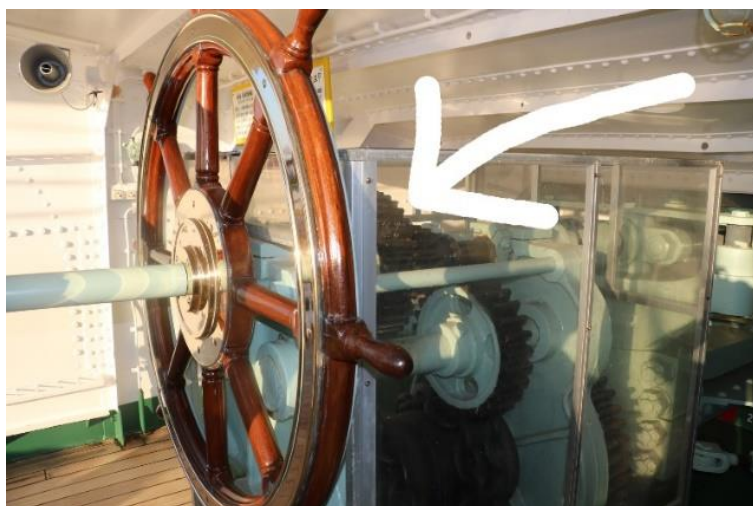


ちなみに、よく目にすることも多い、大舵輪、もちろん海王丸でもみることはできる。一般的に、よく想像されるのが 1 人の人間が大舵輪の前に立ち、優雅に回すというイメージであるが、これぐらいの大舵輪となると違う。というより、そんな簡単なものではない。写真の矢印の箇所を見て頂ければわかると思うが、大舵輪の後ろはでかい歯車のようになっていて 1 人でそう簡単に操縦できるものとはとてもない。な

らば、どう回すかという舵輪の横に立ち、体重をかけて回すのである。それも 1 人で回すのではなく、2~4 人で回すというのである。

海王丸には浪漫がある。もっといえば船そのものに浪漫を感じる。説明するのが難しいが、そこはある意味で閉ざされた世界であり、ある意味で解放された世界といった

感じがする。それでもって人間同士の信頼関係や、個々の責任なくして生きていけない状況のはずである。よく港を「義理と人情の世界」という人がいるが、それにおそらく近いものを感じることが出来た。ましてや海王丸のような訓練船はなおさらなはずである。多くの男たちがここで育ち、航海当直や、それぞれやるべき仕事や責任があり、広大な海の上、たくさんの人間がおなじ 1 隻の船で生活しているのである。状況によっては命を落としか



ねない環境で、生きていたのである。このある種のスリルと広大な浪漫に満ちた生活は実に魅力的である。無論、集団行動が苦手な私にはとてもではないが耐えられない。考えてみれば、以前、宮城県石巻市にサンファン・パウディスタ号も見に行ったが、船の中での共同生活というのはやはり非常に興味深い。それと同時に、ひとえに船と言っても、普段目にしているような貨物船から帆船まで、色々なものがある。当たり前なことではあるが、どの船にも共通しているものもあれば、はたまた全く異なったことだって存在する。色々な種類の船の細かな事柄を調べていこうと思えばそれは勿論膨大な時間と労力がかかる。しかし、私のまわりにはあらゆる船のことに造詣が深いプロの人間がたくさんいて、非常に恵まれた環境というのは確かである。

船に携わる仕事についていながら、船そのものの起源や歴史を熟知している人間というのは果たして実際どれぐらいいるのであろうか。大変かもわからないが、絶対に中身の濃い、面白い史実が満載なはずなので、調べて本ホームページでそれらをお披露目したいと考えている。

ウェバー伊安



3台のベッドが用意されている病室



デッキの上に置かれている
大きな錨